綜楽流尺八の誕生と尺八博士の活躍

中島聖山

前号では室蘭出身の女流尺八家である鈴木藤枝（旧姓佐藤）の活躍について、上京や訪欧を中心に述べたが、今回はその後のアジア諸国での演奏活動と流派創設までを追ってみることにする。

また、北海道の竹友社にとって草分け的存在ともいえる、北海道大学名誉教授の松村松年博士の活躍について触れ、北海道大学邦楽部のルーツをたどってみることにする。

女流尺八家・鈴木藤枝の台湾演奏旅行

ヨーロッパの尺八行脚から帰国した翌年の昭和8年1月23日、鈴木藤枝はチェロと尺八を携えて東京港を出発し、蓬来丸で一路台湾の基隆へ向かった。台湾の婦人嬌風会の招きによるものであったが、ちょうどその頃台湾では宮本信一や関段敏男らが中心となって、台中琴古会設立の準備が進められている時であり、演奏旅行者の受け皿ができていたので、彼女にとっては絶好の機会であった。

昭和8年1月26日午後、蓬来丸は無事台湾の北端の港である基隆に入港した。翌日の新聞はヨーロッパ生活を経験した女流尺八家が、東京から渡台したことを写真入りで報道した。台湾訪問ということで、暖かい南の島を連想していた彼女は、防寒具を持たずに旅立ったが、あいにくその年は寒波で、1月22日頃から台湾全土は寒い日が続いた。特に1月26日は強風と雨で最低気温を記録した。基隆に滞在した4日間、彼女は常に火鉢を抱え込んでいたという。

基隆の少し南にある台北には東京女子大学卒業者で組織する桜楓会があり、40名以上が所属していた。1月27日の夜、桜楓会の新年会があり、彼女も招待され大歓迎を受けた。

台北の後、台中へ移動し世話役の宮本信一宅に落ちついた。彼女の大食漢は有名であるが、早速バナナが食べたいというので、宮本氏がバナナ一房とポンカンを用意すると、全部平らげてしまったという。大好きなバナナを腹一杯食べて満足した彼女は、ピアノと下合わせをすることにしたが、その時になって楽器を汽車の中に忘れてきたことに初めて気づいた。その頃には楽器は汽車に揺られて遙か南の高雄まで行ってしまっていた。演奏会までには余裕があったのでよかったが、着替えもないので宮本夫人の着物を借りて着たが、とても様にならなかった。というのも彼女は体格がよく、背丈が160～170センチもあったからである。手を上げると琴古会の男が脇の下に入ったという。台中の琴古会の面々は特に背が低く、宮本・関段・小川・木原ともに5尺2寸以下だった。

2月3日の台中座で開催した鈴木藤枝歓迎演奏会では、鈴木女史を中心に左右に男2人ずつ並んで演奏したため、ことさら体格の差が気になったという。

1月31日の夜、台中の割烹で報道関係者や三曲関係者も含めた琴古会主催の晩餐会があったが、彼女は量の多いことで有名な台湾料理を平らげ、宮本宅へ戻ってから更に大きなバナナを14～15本とミカン2個を食べたというから、並大抵の大食漢ではなかったようである。

花火3発を打ち上げて開場した2月3日の台中座における歓迎演奏会は、節分とぶつかっていたにもかかわらず、ほぼ満員の盛況で終わった。翌2月4日は台中州青果同業組合事務所の2階で、欧州行脚の体験をテーマに講演を行ったが、これも大変な人気を博した。

こうして、台湾縦断の演奏旅行は大成功に終わった。2月末日の帰国予定を遙かに過ぎた3月17日、彼女は無事東京に着き、4月上旬からは東海方面へ演奏旅行に出発した。

朝鮮・満州への演奏旅行

ヨーロッパから帰国し、女流尺八協会を設立して尺八指南の看板を掲げた彼女ではあったが、東京で門人育成に専念する時間など無かった。東海方面の演奏旅行を終えて帰郷した彼女は、今度は軍部の慰問と各地での演奏を兼ねた朝鮮・満州巡演の旅の準備に追われる身となった。

朝鮮・満州巡演の旅も台湾同様、東京女子大学卒業者で組織する桜楓会や愛国婦人会の招待によるものだった。9月13日東京を出発した彼女は、9月16日釜山公会堂での演奏会を皮切りに、軍部の慰問を主としながら、各地でチェロと尺八の演奏を披露して拍手喝采を浴びた。彼女は愛国婦人会の英雄的存在であり、東京女子大学卒業者の異色タレントとして各地で熱烈な歓迎を受けた。

昭和8年10月22日にハルピンで開催された日満露国際演芸大会は想像以上に盛会なもので、満州側の入場券発売枚数は3千3百枚にものぼり、日露の発売枚数を加えると5千枚以上にもなったというから、歴史的行事だったと云ってもいいのではないだろうか。彼女の前評判はたいしたもので、満州国の皇族にも知れ渡る程であり、10月24日午後5時30分からは、新京で溥儀執政の御前で演奏する光栄に浴したのである。

同年10月下旬帰国した彼女は、その足で金沢市を訪問し、11月3日の金沢愛国婦人会の大会に出席した。

綜楽流尺八を創始し宗家となる

ヨーロッパの尺八行脚、台湾・朝鮮・満州などアジア地域での巡演と、地元東京に腰を落ちつかせる暇の無かった彼女であるが、昭和9年5月27日には、神宮外苑にある日本青年会館で初めての独奏会を開催した。当日は本曲「鹿の遠音」や三曲合奏曲「青柳」など数曲を演奏したが、彼女の大きな音に聴衆は魅了されたというから、プロの尺八演奏家として立派に身を立てられるだけの力量を有していたものと思われる。

昭和12年、彼女は綜楽流尺八を創設して自ら宗家となった。綜楽の綜とは総合の意味であり、楽は音楽の楽である。つまり尺八で邦楽・洋楽を問わず全ての音楽を吹奏する流派ということである。

彼女が新しい尺八の流派を樹立したのは当

然とも云えることで、初心を貫き究極としてたどりついたところといわざるを得ない。というのも、彼女が尺八を吹きはじめた動機が男女差別に対する挑戦であり、邦楽・洋楽を問わない真の音楽の創造だったからである。

邦楽と洋楽を同時に勉強し、尺八とチェロを演奏することになったいきさつを、彼女は雑誌「三曲」の昭和12年4月号で次のように述べている。

「一体に日本音楽家というものは尺八家ばかりではないであろうが、少し偏くつで排他的なきらいがある。自分のやっている音楽のみの塔に立てこもって、一歩も踏み出して他のものを研究してみようという度量がない。（中略）また、一方西洋音楽家と言うものは此の向上心のない、いつも同じ事ばかりしている日本音楽家を軽蔑の目で見ている。さもさも自分達は日本音楽なんかやっている人々とは人種が違うとでも云うかのように高慢ちきである。しからば彼ら西洋音楽家とは何かというと、これは単に西洋人の模倣ばかりしている人種ではないか。私は此の2つの対象を見て、何時も苦笑せざるを得ない。こうした意味から私は東西両音楽を極めてみようと決心したのである（後略）」

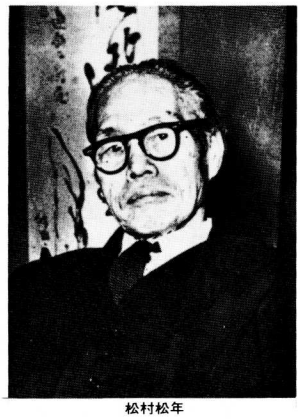
こうした気持ちに忠実に従い、日本音楽として尺八を勉強し、西洋音楽としてチェロを勉強したのである。どちらも本場で勉強すべきであるとの考えから、上京し尺八の腕を磨き、パリでチェロを習ったのである。4年間のヨーロッパでの生活は彼女のこだわらない、何事にも積極的に当たる気性に拍車をかけるとともに、婦人の地位向上と欧州志向という世の中の流れに乗って、彼女は男性尺八家を尻目に思う存分活躍することとなったのである。

しかし、残念なことに、こうした彼女の音楽活動が定着した痕跡がなく、綜楽流のその後の様子や彼女の晩年などについても不明である。

松村松年尺八博士の来道

のちに尺八博士の異名で呼ばれる程の尺八狂だった世界的昆虫学者の松村松年は、明治5年3月5日に兵庫県明石郡大明石町東片端で生まれた。明治20年9月に東京明治学院予備校を経て北海道に渡ったのが、彼と北海道との最初の出会いであった。翌明治21年1月には札幌農学校予科3級に入学し、同24年7月に卒業して同校農学科に入った。この頃から昆虫に関する研究を始め、論文を発表する。

彼が尺八を手にするようになったのは16才というから、数え年であれば明治20年である。この年の9月に来道しているから、手ほどきは東京の予備校時代に受けたのか、それとも札幌に来てから受けたのかとの疑問がわく。後日、川瀬順輔や水野呂堂の楽譜で勉強したとあるので、琴古流荒木派だったことは間違いないが、明治20年であれば川瀬順輔はまだ山形にいる頃であり、直接手ほどきを受けることは出来なかったはずである。


松村松年

当時、すでに札幌に琴古流荒木派の師匠がいたのだろうか。大正後期に函館の長谷川羊童が荒木派の幹部として活躍を始めるが、彼も道内では師匠を得ることができず、はるばる東京まで勉強に出掛けていたのである。

いずれにしても、松村松年がどこの誰に師事して尺八を始めたのかは定かではない。

明治29年7月、弱冠24才の若さで、札幌農学校の助教授に昇進した彼は、農学研究のため明治32年から3年間、ドイツに留学することとなった。上手ではなかったが尺八が好きだった彼は、25銭で新しい尺八を買い、それをトランクに入れてドイツへ留学した。

明治35年10月帰国した彼は、札幌農学校教授となった。帰国後まもなくある演奏会で尺八を演奏したところ、その翌日、自宅のポストに学生から「先生の尺八は脱線だらけで、殆ど聞くに耐えません。大学教授としての体面にかかわりますから、今後絶対に公衆の面前では止めて下さい」という文面の投書があった。

これを受け取った松村松年は、眠れぬ一夜を明かし、遂には石にかじりついても天下の名演奏家になってみせると決意したのである。それからというもの、毎日2～3時間の稽古を欠かさず、妻に山田流の箏を習わせて合奏練習も行った。地元の糸方である山田流の新田佐美治先生などを自宅に招いて、徹底した合奏研究も行った。

北大千鳥会の結成

研究の合間を縫って血の出るような稽古を重ねるうちに、彼の演奏技術は向上するとともに、いつしか誰ともなしに彼を「尺八博士」と呼ぶようにまでなった。

約10年間の精進を続けるなかで、北大千鳥会という邦楽愛好家の会を組織し、毎年1～2回演奏会も開催できるようになった。当時は箏曲のほかに長唄も入れ、北大中央講堂で公開演奏をしていた。長唄の芳村伊十郎や尺八の川瀬順輔、地唄の川瀬里子らと合奏し、親交を深めたのも此の頃だった。

千鳥会は教授のための組織ではなく、あくまで愛好家が集って公開演奏する程度のものだった。しかし、大正後期になって都山流の畑中康山や琴古流鈴慕会の藤沢鈴昭、同じく琴古流竹友社の斉藤玉洞、上田流の青木呂憧らの活躍により、北大には多くの尺八愛好会が誕生した。都山流の北大康琳会では蘇武・五十嵐・春田らが中心に活躍していたし、琴古流鈴慕会の北大鈴韻会は松本精一・阿部谷

おこと・三味線――邦楽専門
傑屋楽器店
〒001 札幌市北区新川3条14丁目3－12
(011)761－9057
●札専カード・ローンをご利用ください。

人・久保義雄らが柱となっていた。また琴古流竹友社の北大八千代会は佐伯直臣が中心であり、松村松年博士と同派であることから千鳥会を吸収、引き継ぐ形となってもっとも勢力のある同好会だった。上田流の北大美登里会は佐伯才一や山岡敏郎が会を支えていた。

大正9年1月27日に開催した北大八千代会の演奏会は、翌日の北海タイムスに大きく取り上げられた。出演者も多く松村松年博士の他に、荒木・原・堀江・出口・加藤・小林・中島・那須・小田・小笠原・緒方・岡崎・小野寺・高山・吉田など多数の名を連ねている。また、大正15年5月22日と23日の両日、札幌豊平館で行われた北大八千代会、玉声会連合大会には、東京の川瀬順輔、川瀬里子が出演し、盛大に催された。

第1回北大邦楽会

北大学生の中に尺八各流派の愛好会が組織され、競って活動するようになった大正13年11月30日、第1回目の北大邦楽大会が北大中央講堂で開催され、聴衆は1400人が参集した。

演奏曲は三曲合奏曲、長唄、古典本曲など全部で15曲だった。演奏も都山流・琴古流・上田流と全流派が出演した。当時の札幌市の人口は14万人程だったが、その1%が聴衆として集まったのだから、大成功といえるだろう。

都山流では平野康嶺・五十嵐康亭・春田康汀らが「摘草」を演奏し、日賢光輔が「楓の花」を、そして、蘇武康涯が長唄「岸の柳」を演奏した。

上田流では佐伯呂恍が「稚児桜」を演奏し、琴古流では高山保二・松本精二・手島・佐伯直臣・久保茂雄・阿部谷人らが演奏した。長唄では石井硯が「土蜘蛛」を暗譜で演奏し、注目を集めた。演奏会の最後は高橋北雄（空山）が古典本曲「阿字観」を吹奏し、尺八の魅力を十分に聴かせた。橋本賀寿井社中が地元糸方として賛助出演した。

その後も北大邦楽大会は継続開催され、昭和2年11月3日には、地元の新田佐美治社中を糸方として、北大中央講堂で松村松年博士司会のもと実施された。

NHK札幌放送局開局3周年記念放送

昭和6年6月5日から一週間の日程で、NHK札幌放送局の開局3周年を祝う記念放送があった。第1日目は午後7時25分から日本放送協会北海道支部理事長の大瀧甚太郎が挨拶をし、続いて吾妻札幌逓信局長が記念講演をした。記念講演の後は午後8時から邦楽演奏に移り、謡曲「羽衣」、長唄「四季の山姥」と進み、初日の最後は松村松年博士の尺八独奏で締めくくられた。この時博士は愛用の2尺管で古典本曲「奥州鈴慕」「里神楽」「阿字観」の3曲を独奏した。これが尺八博士の名を欲しいままにした松村松年の最後の公開演奏となった。

当時、ラジオでの邦楽番組は多く、特に新日本音楽と称した宮城道雄作曲の新作に人気が集中した。5月2日午後8時からの邦楽の時間には、新日本音楽と題して「春の海」「春の夜の風」「山の水車」「朧夜」の4曲を尺八畑中康山、箏大久保雅震で放送しているし、5月20日の午後7時25分からの邦楽の時間には、札幌市公会堂から中継で新日本音楽「軒のしづく」を箏横山光喜勢・岩間多喜井・川上喜志井、三絃大野山喜井・高橋喜代井、尺八藤沢鈴昭で放送している。

このように世の中が新日本音楽に傾斜していたさなかに、自分の最後の公開演奏を古典本曲独奏で飾った尺八博士の心意気は、正に尺八家の中の尺八家と云っても過言ではないように思える。

最後の訪欧と尺八

昭和7年1月下旬、博士は退官を間近に控えて、最後のヨーロッパ訪問に旅立つことになった。目的はフランスのパリで開催される第5回万国昆虫会議に出席するためだった。博士は神戸から船で訪欧する予定だったが、途中東京で下車し、尺八家仲間の壮行を受けた。博士の壮行会は1月23日夜、東京会館の和室で行われ、松本学前社会局長官や秋津島清美力士など12名が参集し、夜遅くまで尺八談義に花を咲かせた。尺八家としては中島雅楽之都・青木鈴慕・谷狂竹・川瀬順輔・中塚竹禅・藤田鈴朗など日本的に有名な人物が一堂に会し、博士の道中の無事を祈った。

この時、尺八博士は答礼として愛用の2尺3寸管を吹いた。旅行用のトランクには、この他に2尺管も入っていたという。

松村博士送別会

東京でのこうした人脈を見ても、いかに彼が中央の尺八界に認められていたかを窺い知ることが出来る。北大の邦楽愛好会が中央に直結した松村松年博士の手によって創始されたことは、とても意義深いことであり、北海道の尺八界の黎明期を世界的人物が担ってくれたことに我々は誇りを持たねばならない。

使用写真は日本音楽社「三曲」より転載

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

北大邦楽会と上田流美登里会の誕生

中島聖山

都山流および琴古流の鈴慕会・竹友社の北海道における創成期の状況と北海道大学邦楽部のルーツについて6回にわたって触れてきたが、今回は北海道大学邦楽部のその後の様子と、上田流の北海道進出について述べてみることにする。

上田流の北海道進出に関しては、特に北海道の上田流の産みの親とも言うべき、青山呂憧と上田流宗家、上田芳憧の来道について焦点を当て話を展開してみる。

北海道大学邦楽部の誕生

北海道大学における邦楽愛好会の歴史は、明治35年10月の松村松年教授の尺八演奏に始まる。ドイツ留学から帰国した松村博士は、学内の演奏会で尺八を演奏したが、上手に吹けなかったとみえ、聴いていた学生から悪評をかった。これに奮起した教授は、その後命懸けの稽古を重ね、「尺八博士」の異名を取るまでになった。尺八と言えば三曲合奏になくてはならない楽器なだけに、尺八音楽にとって箏、三絃との合奏も重要な要素である。教授は合奏力をつけるため地元の糸方や山田流箏曲をたしなむ妻との合奏練習に力を注いだ。こうした稽古を積み重ねるなかで、松村松年教授の邦楽仲間は次第に増え、北大千鳥会の結成につながっていった。

結成当時の北大千鳥会は、邦楽をたしなむものであればジャンルに関係なく誰もが参加できる自由なグループで、メンバーのなかには地唄のみならず、長唄や謡曲等の愛好家も加わり、一緒に楽しんでいた。だから会主の松村松年教授と師弟関係にある者の集まりではなく、あくまでも互いに学内の邦楽愛好家が寄り集まって、年1～2回の演奏会をする程度のものだった。

会主の松村松年教授が琴古流をたしなんでいたことや、札幌に都山流の師匠がいなかったことなどから、北大千鳥会の尺八メンバーは、ほとんど琴古流だった。松村松年教授の尺八に対する情熱は誰にも負けないものであったが、彼は常にアマチュアの領分をわきまえ、川瀬順輔をはじめ東京で活躍していた各派のプロ尺八家と親交を深めながら、自己研鑽の目標を失わないよう努めていた。

琴古流竹友社の専門師匠として斉藤玉洞が来札し、本格的な活動を展開しはじめたことにより、琴古流竹友社に所属する学生たちで組織する北大八千代会が結成された。北大八千代会は北大千鳥会と違って尺八愛好家のみの集まりであり、同流同派の学生たちによって構成されていた。これが北大における尺八愛好会の始まりである。

大正9年1月27日に開催した北大八千代会の演奏会は、翌日の新聞に大きく取り上げられた。また、斉藤玉洞主宰の玉声会と北大八千代会との合同演奏会も企画され、大正15年5月22日と23日の両日にわたって開催された演奏会には、はるばる東京から川瀬順輔と川瀬里子が来札し、演奏会に華を添えた。

北大康琳会の誕生

北大における都山流の始まりは、入学前に出身地の神戸で畑中康山に師事していた中野長俊が、入学後も独学で吹きつづけたことによる。活動家だった中野長俊は同級の村田柳一に手ほどきし、大正6年4月頃から二人で都山流尺八を吹きまくっていた。

大正9年1月に行われた、畑中康山や流祖中尾都山を招いての第2回篁会の演奏会が大成功に終わったことや、その後畑中康山が札幌に定住し、都山流尺八の専門師匠として流人の育成に専念したことなどにより、都山流は飛躍的に流勢を拡大した。大正9年3月に中野長俊や島谷柳一は卒業したが、新曲を得意とする都山流の流風は若い学生たちの心を良く捕らえ、急速に普及した。北大康琳会は学生たちの尺八愛好会のなかでも、最も規模の大きな組織となり、札幌康琳会等と一緒になって積極的に演奏活動を展開した。

北大康琳会は大正9年1月に行われた第2回篁会の演奏会が、事実上は中野長俊と島谷柳一の卒業記念送別演奏会だったことを踏まえ、その後も毎年1月に卒業生送別の演奏会を実施してきた。

北大康琳会送別演奏会

北大邦楽会の開催

このように、北大の学生たちのあいだには尺八が流行し、各流派が競い合って音楽活動を展開していた。当時の学生たちは、各自先生について稽古を続けながら、学内で尺八愛好会の活動をしていた。琴古流鈴慕会の北大鈴韻会や琴古流竹友社の北大八千代会、都山流の北大康琳会、上田流の北大美登里会等がそれである。従って学内各愛好会の優劣は、各流派の優劣につながることでもあり、そうした意味からも各流派の師匠たちは、北大の尺八愛好会の充実強化に力を注いだ。

学内の気運が高まった大正13年11月30日、北大中央講堂で第1回北大邦楽大会

北大春季邦楽大会

北大文武会第１回発表会

が開催された。演奏曲は三曲合奏を中心に古典本曲独奏や長唄など全15曲だった。演目と演奏者については、前号で詳しく述べたので今回は省略するが、出演者は一年半後に行われた第2回春季大会の様子から、およそ30名と推測できる。

高橋空山の古典本曲「阿字観」の独奏で締めくくられた第1回北大邦楽大会は、各流派の支援や地元糸方の賛助出演により市民１４００人を集める盛況となった。勢いづいた学生たちは、その後毎年春秋2回邦楽大会を開催する計画を立てたが、残念ながら大正14年には開催されず、第2回北大邦楽大会は大正15年春に、北大中央講堂で開催された。

定期演奏会の開催により学内の活動が定着してくると、糸方の協力体制も次第に整い、三曲合奏の環境が作り上げられた。それとともに邦楽愛好家が集って実施していた北大邦楽大会は発展的に解消し、北大文武会邦楽部として新たに組織化された。そして、昭和3年11月10日には、糸方に菊茂社中の賛助出演を得て、第1回発表会が開催された。学生の出演者は40名にのぼり、以前よりさらに充実した演奏会となった。

上田流の創流

上田流の創始者である上田芳憧は、明治25年9月26日に大阪の履物商である上田直一の長男として生まれ、本名を喜一といった。父の尺八を聞いて育った上田芳憧は、8才の頃から尺八を手にするようになった。明治40年に初代中尾都山の門人となり、同43年には准師範に昇格して上田佳山と名乗った。

初代中尾都山の代稽古を務めるほどの技量を有していた上田佳山は、入門後8年目の大正3年に師範と竹琳軒の冠称を許された。創作意欲に燃えていた上田佳山は、尺八二部合奏曲「水の行方」と尺八独奏曲「五月雨」を作曲し、大阪中の島公会堂で行われた慈善演奏会で演奏した。こうした上田佳山の積極的な創作活動が当時の都山流幹部のなかで批判されることとなり、宗家の代稽古までした上田佳山が惜しくも大正6年3月19日に退門届けを出す結果となった。

自ら進むべき道を選択した上田佳山は大正6年3月25日、大阪市北区西寿町の冷雲寺に門人を集め、上田流の創設を宣言した。上田流創設と同時に芳眼と改名したが、その後芳憧を名乗るようになった。

大正6年11月25日に、大阪近松座で上田流創設記念連合大会と称する演奏会を開催し、名実共に上田流の存在を世に発表した。

上田芳憧の弟である上田竹憧が作曲に力を入れ、早くから長唄の手付けをしていたことから、上田流の尺八音楽には長唄系の曲が多い。

青山呂憧の来札

大阪を中心とした上田流の創始によって、北海道においても都山流から上田流への転門の動きがあった。

佐伯才一は広島の商家の息子だった。姉が箏曲を演奏していたことから、才一も中学時代から尺八を吹き始めた。当時の広島は、島原帆山を中心とした都山流の地盤が厚いところだった。才一は都山流の師匠について勉強した。農学を志した佐伯才一は、遠く海を渡って、北海道大学農学部に入学した。彼が入学した大正後期は学生たちによる邦楽の演奏活動が最も盛んな頃であり、彼もすぐに邦楽愛好会に入った。当時は琴古流竹友社と都山流の畑中康山に師事している学生が主勢力となり、精力的に活動を展開していた。そのため佐伯才一も当初は都山流の仲間たちに混じって尺八を吹いていた。

しかし、その後彼は上田流に転門する事を決め、すでに札幌に来ていた上田竹童の門人の久慈寛憧に師事しようとしたが、意に合わず断念した。

北海道における上田流の将来を考えた佐伯才一は、直接大阪の上田流宗家（上田芳憧）に連絡を取り、上田流師匠の札幌派遣を嘆願したのである。大正6年に都山流から分派していくばくもない上田流は、大阪を中心に関西方面で勢力を伸ばしていた。大正11年には２２２人の師匠が、全国各地で上田流尺八道の普及に努めていたが、残念ながら東京以北には上田流を教える者が誰もいなかった。

佐伯才一から師匠派遣の依頼を受けた上田芳憧ではあったが、北海道は全く地盤のない土地だけに勢力拡大の新開地としての魅力はあっても、生活のことを考えると不安があったに違いない。考えた末、上田芳憧は師匠になったばかりの青山呂憧の派遣を決意した。大正12年の春のことである。

青山呂憧は大正10年1月15日に大阪中央講堂で行われた第2回楽典講習会に参加しているが、憧号はついていない。また大正10年12月の上田流幹部名簿にも名を連ねていないことから、彼が師匠の資格を取ったのは、大正11年から渡道する大正12年春までの間ということになる。

師匠になったばかりの彼が、生活の保証もないまま故郷を遠く離れた北海道への移住を決意したのであるから、上田流の普及と芸道の追求に対する彼の一念は、想像を絶するものがあったろう。

大正12年春、来札した青山呂憧はすぐに「美登里会」を結成し、活動を開始した。高い理想に支えられた青山呂憧の芸術感は、多くの尺八愛好家の心を捕らえ、「美登里会」の発展へとつながって行った。アマチュアといいながらも、彼の尺八道に対する真剣な態度は、他のプロ尺八家達に勝るとも劣らぬものだった。彼は自分の芸術感について、昭和11年発行の「芸術クラブ」に投稿しているので概略を紹介する。

『芸術家は清節を守り赤貧のなかにも芸術に対して忠実なる努力をしなければならないし、そうすることにより芸術的気品が生まれ真の崇厳な芸術が生まれる』と芸術に対する持論を披露する一方、人間としての生きざまにも触れ、『芸術に真剣なる人は人生についても真剣であり、反対に芸術に怠惰なる人は、また人生に於いても流されて生きている』と言いきっている。

上田芳憧の来札

青山呂憧が佐伯才一の依頼で来札して2年半後、大正14年12月には大阪より上田流宗家を招いて、上田流尺八を披露する大演奏会が開催された。

大正14年12月11日と12日の2日間にわたって行われた演奏会は大成功に終わり、初日は約500名の入場者を数えた。

上田流の特色を出し切ったとも言えるその演奏会は、長唄や日本舞踊の入った大がかりな舞台装置を使用し、演出を凝らした新しい形態の演奏会だった。大阪からは宗家上田芳憧をはじめ、生田流箏曲の菊岸大勾当が来札した。菊岸大勾当は地元尺八家との合奏練習のため早くから札幌入りし、上田芳憧も7月6日には来札して、演奏会に向けての総練習に入った。

地元の経済界、邦楽会はともに協力を惜しまず、会の成功に一役買った。地崎宇三郎を代表とする地崎組が後援となり、糸方では山田流の笹島花井、原松寿、生田流の友広勾当、長唄の鳥羽屋三十郎、清元の感元延志葉、鳴物の八住小吉・堅田喜三代らが賛助出演した。また日本舞踊では藤間寿々衛が出演し、会に華を添えた。

尺八は青山呂憧を始め桑島呂昭・上林呂吃・竹山呂惇・佐伯呂怯・水上呂白・作田呂成・遠谷呂峰・亀井呂城・高橋呂洲・高井呂葉・岩瀬呂濤・清水呂鳳・中野呂声・本郷呂静・友広呂仙・山本呂狗・秋山呂亘・大平呂観・原口呂星・二瓶呂創・堀向呂渉ら22名が出演した。来札以来、わずか2年半でこれだけの門人を育成し、上田流尺八を普及させた業績は大きく、後の上田流の発展に大きく貢献することとなった。

プログラムは2日間とも長唄で始まり、中間で尺八独奏そして舞踊で終わる形を取った。初日、宗家上田芳憧は「田舎砧」を青山呂憧と合奏し、「五月雨」を独奏した。また2日目は秘曲「松風」を青山呂憧と合奏し、「岩清水」を独奏した。

7月11日

1、長唄・巽八景
2、越後獅子
3、長唄舞踊・岸の柳
4、郭公
5、清元・造　菊睦言
6、雲雀の曲
7、長唄・夢
8、さむしろ
9、長唄・俄獅子
10、月の流
11、里の暁
12、長唄・勧進帳
13、松風
14、田舎砧
15、長唄舞踊・鶴亀
16、清元・玉川
17、五月雨
18、桜狩
19、長唄・秋の色種
20、明治松竹梅
21、舞踊・藤娘
22、八重衣
23、舞踊・山姥

7月12日

1、長唄・小鍛冶
2、茶の湯音頭
3、舞踊・松の緑
4、近江八景
5、清元・造　菊睦言
6、名所土産
7、長唄・連獅子
8、野辺の錦
9、長唄・元禄花見踊
10、水の行方
11、春重ね
12、長唄・助六
13、臼の声
14、松風
15、長唄舞踊・鶴亀
16、舞踊・山姥
17、岩清水
18、笹の露
19、長唄・吾妻八景
20、青柳
21、舞踊・藤娘
22、須磨の嵐
23、舞踊・六玉川

上田流10周年記念演奏会

大正14年7月に札幌劇場で開催した、宗家上田芳憧を招いての演奏会の成功は、上田流の存在を明確にするとともに、その後の流勢拡大に大きな影響を与えることとなった。

プログラム表紙

都山流から分派した上田流にとって、全国規模の確固たる組織作りは悲願であり、それだけに北海道開拓に対する期待は大きかったに違いない。全くの無勢力地帯だった北海道に師匠を派遣して、僅か2年半で20名以上の流人を抱えるまでになったのであるから、流本部の期待も増したであろう。

上田芳憧を招いての大演奏会の翌年は、都山流創始30周年の記念の年であった。都山流は大正15年2月14日に、東京の帝国劇場で30周年記念大演奏会を開催したのをはじめとし、全国各地で記念の演奏会を開催した。

これを受けて北海道でも、大正15年3月20日に康琳会が旭川の商業会議所で30年を祝う記念演奏会を開催した。地元の伊藤彩山が中心となり、札幌から畑中康山を招いての演奏会だった。

旭川で都山流創始30周年記念の演奏会が行われた大正15年3月20日、札幌では上田流創始10周年記念演奏会が行われていた。札幌帝国館で青山呂憧の司会で開催された上田流10周年祝賀記念演奏会は、糸方に遠藤操琴を招いての盛大なものだった。

上田流の創始は大正6年3月であるから、正確には昭和2年が10周年である。その証拠に、昭和2年には上田流本部主催の記念演奏会は行われなかったものの、上田流創始10周年を祝う記念の演奏会が阪神方面で開催されている。昭和2年4月10日に京都市で行われた章友会の演奏会や、同年5月15日に神戸で行われた歌友会がそれである。歌友会の演奏会には宗家上田芳憧が出演している。

なぜ1年繰り上げて上田流創始10周年の記念演奏会を札幌で開催しなければならなかったのだろうか。しかも、都山流創始30周年の記念演奏会が行われる日にである。推論の域を出ないが、そこに上田流の流勢拡大に対する気迫と、流人一丸となって上田流の存在を北の大地に根づかせようとする意気込みを感じないではいられない。

青山呂憧の精力的な努力によって、上田流は着実に流勢を拡大し、毎年定期的に演奏会を開催するまでに発展した。また札幌支部を設置して、地方への進出にも力を注いだ。作田呂恍を中心とした帯広美登里会や山口呂勝を中心とする追分美登里会がそれである。

帯広美登里会は昭和4年4月6日、帯広の栄楽座で札幌から青山呂憧を招いて、最初の演奏会を開催した。また同年7月29日には追分の都座でも追分支部美登里会の演奏会が行われた。

こうして上田流は、大正12年春に青山呂憧が来札して以来、未開の地だった北海道に大きな足跡を残し、現在の上田流の基盤を作ったのである。

伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇その8

上田流の流勢拡大

中島聖山

札幌の状況

北大農学部の学生として、佐伯才一がはるばる広島より札幌へ移住した大正11年当時、札幌には上田流尺八指南として、上田竹童の門人である久慈寛童がいた。

久慈寛童がその当時、上田流尺八の専門師匠として門人の育成や演奏活動を専業としていたとは思えない。というのは、大正11年に上田流宗家事務所が発行した「上田流史」の師匠名簿（准師範以上の職格者が掲載されている）に載っていないからである。また、久慈寛童の渡道目的や渡道年月、北海道における最初の定住地など、彼に対する詳細が不明であり、確定的なことが言えないからである。

これは、当時の流人が既に他界していることと、帯広を実家とする久慈寛童の細君も数年前にこの世を去り、子孫の消息がつかめないことによる。

いずれにしても、久慈寛童は大正後期に渡道し、札幌に定住して上田流尺八を教えていたことは事実である。そして、大正12年春になり、青山呂憧が宗家の派遣師匠として来道し、佐伯才一ら地元流人の支援を受けて札幌を中心に積極的な活動を展開しはじめたため、昭和18年に内田明憧を頼って北見へと移住したのであろう。

このように、久慈寛童と対決する形で札幌入りし尺八指南を開始した青山呂憧は、当初佐伯才一ら流人の世話で居を構え生活していた。しかし、尺八教授だけでは生活していけるはずがなく、札幌市の職員となって測量関係の仕事についた。

来札してまもなく、青山呂憧は自然豊かな北の大地に立った印象を忘れまいと、「美しい里に登る」という心境を胸に『美登里会』を結成し、組織強化と流勢拡大に尽力した。

青山呂憧の人柄に引かれたのであろう。門人の数は急増した。彼が渡道してわずか2年あまりで、門人の数は既に20名を越えるまでになったのである。宗家派遣の師匠として渡道した責を充分に自覚していた彼は、流として未踏の地とも言えた北海道での上田流の普及状況を見てもらうとともに、2年半にわたる活動の成果を報告する意味から、大正14年12月には、宗家上田芳憧を招聘して大演奏会を開催した。

2日間にわたった演奏会は、地元糸方や立方の支援もあり、大成功に終わった。この時、宗家を囲み、舞台で記念の写真を撮ったが、写真屋が失敗したため、後日、主だった出演者を集めて写真屋まで行き、そこで記念写真を撮りなおしたという。

演奏会の経験がない門人たちに対する予行練習とも思えるが、宗家を招聘しての大演奏会の前に、大平館において、美登里会の初めての演奏会を開催している。糸方や立方の賛助を得ての会であり、上田流にふさわしい賑やかな会だった。

大正14年12月、上田芳憧を招いて

高い芸術論と敬虔な尺八道に燃えていた青山呂憧は、献奏を志し、大正15年から毎年正月には、門人たちを従えて北海道神宮を訪れ、上田流本曲を献奏して、一年の精

青山呂憧宅前にて

大正14年、美登里会演奏会　於大平館

進を誓うとともに「尺八道、神道に通ず」との自らの芸術に対する姿勢を貫いた。こうして大正15年から始まった北海道神宮の献奏会は、現在もなお上田流幹部の有志により継続実施され、青山呂憧が高々と掲げた尺八道の精神が生き続けている。

少しずつ力をつけた青山呂憧は、経済的にも余裕が出来たのであろう、昭和2年には北海道の代表的な獣である熊の皮を宗家に寄贈している。寄贈のいきさつなど詳しいことは不明であるが、この熊の皮が現在も宗家邸に存在するのか確認してみたいと思っている。

昭和2年、家元に熊皮を贈る

帯広地方の状況

上田流の地方拡大は作田呂恍（後に呂憧を名乗った）による帯広方面と、山口呂勝の活躍による追分方面に始まった。

帯広地方における上田流の普及は、宗家実弟で上田流宗家補佐役の上田竹童の門人である久慈寛童の弟子であり、後に青木呂憧にも師事していたと思われる作田呂恍の尽力によるものである。

作田呂恍は昭和2年、十勝農業高校（現在の帯広農業高校）の教師として帯広に移住し、昭和14年までの12年間、帯広で教職のかたわら上田流尺八の教授・普及に活躍した。作田呂恍は同じ教職仲間の庄司篁童と協力して、演奏活動にも力を注ぎ、地元糸方の温習会等にも積極的に出演して上田流の流勢拡大に努力した。

また、庄司篁童は帯広の駅前で個人病院を開業していた市之川篁壮らを養成し、経済界への尺八普及のきっかけを作った。

このように作田呂恍、庄司篁童、市之川篁壮らの努力により、学校関係、支庁市役所関係、財界関係など、各方面にわたる普及の基盤が整ったことにより、最盛期には帯広管内に40～50名の流人を抱えるまでに急成長したのである。

しかし、作田呂恍が昭和14年に転勤のため帯広を去り、続いて庄司篁童も転勤となる等、上田流の柱となっていた活動家が相次いで離帯したため、指導者を失った門人たちは、時間の経過とともに流を離れ10数名にまで流人が減少してしまった。

戦後の昭和21年に帯広三曲協会が発足したが、これを契機として庄司篁童や市之川篁壮、坂東陽憧、斉藤吟鈴などが中心になり、消滅寸前になっていた上田流尺八の音楽活動を再開した。

細々ではあったが再開された活動に輩車を掛け、一層発展の途をたどらせた要因には、堀井小二朗の度重なる来帯がある。

堀井小二朗は7孔尺八の名手として名高く、東京を中心に自作の現代曲を演奏して歩くなど、従来の尺八本曲にこだわることなく、時代にマッチした幅の広い音楽活動を展開していた。彼は北海道に知己が多かったとみえ、頻繁に来道しては各地で講習会を開催したり、社中の演奏会に出演するなど、上田流尺八の普及発展に一役買っていた。

堀井小二朗が帯広にくるようになったのは、昭和23年頃からであり、知己の庄司篁童を訪ねてであった。彼は余程十勝の大自然に心を打たれたのであろう。「十勝馬唄」「新十勝追分」「とんころ節」「十勝木挽唄」など、十勝をテーマにした曲を何曲も作曲している。

堀井小二朗は来道の度に、帯広に限らず旭川や札幌など上田流の流人がいる土地では、流人育成のための講習会を開き、中央から遠く離れた北海道の流人に、広く勉強の場を与えたのである。

その後、昭和24年になって北見から久慈寛童が移住し、箏曲教授をしていた細君と協力して上田流の再興を試みたが、もとのような流勢は戻らず、彼もまた4～5年で美幌へ転居したため、再興は不発に終わった。

久慈寛童は相当に吹けた人物であり、細君は山田流箏曲を教えていた。上田竹童の弟子として、主に門人の育成に力点を置き、活動していたようであるが、仕事の関係だと思われるが転居することが多く、札幌・北見・帯広・美幌・函館と道内各地を転々とした。その度に、転居先で門人の育成に当たったため、門人は道内各地に散在するが、まとまった力とはならず、大きな勢力には発展しなかった。

久慈寛童のあとを埋めたのが小西華山である。小西華山は営林局の職員であり、仕事がら道内各地を転勤して歩いていた。昭和28年に帯広営林局に配属となった小西華山は、衰退していた上田流の再興を図ろうと奔走した。その結果、現在でも帯広三曲協会の幹部として活躍している木村麗山を始め、鈴木吹山など10数人の門人を抱えるまでになった。

堀井小二朗の来道に伴い、帯広では市之川篁壮や坂東陽憧、木村麗山らが、その恩恵をもっとも強く受ける結果となった。特に市之川篁壮は、流本部からその技量を高く評価され、宗家から上田流の最高資格である臥龍斉大師範を許されるとともに、平成元年には地元で十勝文化賞を受賞した。

また、平成3年には地域文化の向上に貢献した業績により、帯広市民文化賞を受賞するなど、北海道の上田流の流人としては、誉とも言える数々の賞を受賞した。

現在は木村麗山が竹鶯会を結成し、門人の育成に当たるとともに、音楽活動を続けている。

坂東玉三郎展

'93年2月4日(木)～3月7日(日)
※火曜日休館※2月22日(月)は臨時休館日
五番館西武B館7階=赤れんがホール

入場料：一般・大学生700円(600円)／中・高生500円(400円)／小学生以下無料
※( )内は前売・団体10名様以上料金※消費税込み
舞台裏から私的な空間までを、篠山紀信氏撮影の未公開を含む写真約80点や、さまざまな展示物、VTRなどでご紹介します。

坂東玉三郎展も、メンバーズなら入場無料。
赤れんがホールメンバーズ新会員募集
赤れんがホールで開催される美術展、展示会の無料ご招待など会員だけの特典を盛りだくさんに。「赤れんがホール通信」も隔月でお届けします。

お申し込み・お問い合わせ
B館7階=赤れんがホールメンバーズ☎011(251)0111総合案内

五番館
SEIBU
火曜日定休 電話 011(251)0111 総合案内

小西華山師（夫妻）と門人

北見地方の状況

北見地方における上田流の開拓は、久慈寛童の門人である高橋宇山に師事した、内田明憧の活躍によるものである。

内田明憧は昭和15年まで遠軽町に住み、上田流尺八の普及に努めていたが、高橋宇山に関する資料が皆無なため、いつどこで高橋宇山から上田流尺八を学んだのか不明である。

しかし、高橋宇山の弟子たちが北見地方を中心に活動していることと、高橋宇山が師事した久慈寛童が札幌在住であったことなどから、次のような推測が出来る。札幌で久慈寛童に上田流尺八を学んだ高橋宇山は、北見地方に移住し内田明憧らに尺八を教えた。そして、北見地方にも長く滞在すること無く本州へと転居していったのではないだろうか。

遠軽で門人の育成に当たっていた内田明憧は、昭和15年に北見へ移転し、活動の本拠地を道東の中核都市である北見へと移したのである。内田明憧の努力によって、道東における上田流の基盤は次第に整っていった。しかし、仕事との両立や流勢拡大に対する力量などを考えたのだろうか。昭和18年には札幌から久慈寛童を北見に招いている。札幌の基盤は青木呂憧に押さえられていたので、久慈寛童にとってこの話は幸運だったに違いない。もしかすると久慈寛童から持ちかけた話だったかもしれない。

いずれにしても、専門師匠としての久慈寛童が北見に転居したことにより、道東における上田流の流勢は強化されることになった。久慈寛童は内田明憧が築き上げた地盤を受け継ぎ、北見を中心に美幌町や津別町へも出稽古して、勢力拡大に努めた。戦争も終わり、社会的な落ち着きとともに門人も次第に増え始めた。そして昭和22年6月14日には、竹壮会主催の演奏会を、北見で開催している。門人の中に、国鉄の職員が多かったとみえ、鉄道集会所で演奏会を行っている。

流勢の安定とともに自信を持った久慈寛童は、昭和22年に大阪より恩師である宗家補佐役の上田竹童を招聘して、講習会を開催したのである。当然のことながら、演奏活動にも力が入った。特に久慈寛童と内田明憧のコンビは、道東における上田流を象徴するかの如くであり、昭和22年にはNHKラジオを通じ、道内の邦楽ファンに上田流本曲の妙味を披露した。

新憲法施行記念上田流尺八 竹壮会演奏会昭和23年５月

さらに昭和23年5月25日には、北見の商工会議所ホールで、竹壮会主催の新憲法施行を記念する演奏会を行った。この会には地元の糸方として、生田流正派の石川社中が賛助出演した。

しかし、こうした北見地方における上田流の流勢拡大も、昭和24年に久慈寛童が北見を去り、帯広へ転居することにより下火となった。久慈寛童の転居後は、美幌や津別の出張稽古も含め、内田明憧が上田流の地盤を守ることになったが、職務が忙しくなってきたこともあり、おしくも昭和27年には、尺八指南を中止してしまった。指導者を失った竹壮会は次第に勢力を弱め、都山流の流勢に押されることとなった。

上田流系図

（北海道地区）

- （宗家）上田芳憧
  - 青山呂憧
    - 佐伯才一
      - 渡辺裕憧
      - 大萱生幽憧
      - 関口楓憧
      - 岡田悦憧
      - 関口葉憧
        - 遠藤春憧
      - 亀岡幻憧
      - 相馬駿憧
    - 山口呂勝
    - 広岡隆憧
    - 池田筥憧
      - 田中旺憧
      - 杉山匠憧
  - 堀井小二朗
    - 稲垣桂清都
      - 大島斉峰
  - （宗家補佐役）上田竹童
    - 久慈實童
      - 庄司篁憧
        - 市之川篁壮
          - 芳滝篁仁
          - 高谷壮山
      - 作田呂憧
      - 高橋宇山
        - 内田明憧
          - 平野斉憧
            - 佐藤斉聘
            - 西原斉岳
            - 田原斉観
            - 平野斉穂
            - 西野斉玉
            - 田中斉水
        - 佐賀宇憧
          - 菅原周憧
            - 佐藤師憧
            - 手塚鳳憧
            - 小西華山
              - 木村麗山
                - 米沢麗竹
                - 藤田雄山
                - 佐藤重山
                - 中川峰山
                - 鈴木優山
                - 後藤清山
                - 大場峰山
                - 糸瀬親山
                - 棒田陽山
                - 鈴木吹山
              - 坂東陽憧
                - 渡辺陽龍
              - 湯浅
              - 菅原宵憧
              - 西村眩憧
            - 鴨野旭憧
        - 小比賀雪憧
          - 古賀玲憧
        - 清水岳憧
        - 田端
          - 木島偉童

伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇その9

都山流北海道幹部会の設立

中島聖山

旭川地方の状況

大正6年1月頃、伊藤彩山は旭川で琴古流河本派の堺という人物から、都山流楽譜の手ほどきを受けたという。旭川には河本派の流人がいて、大正15年の夏には河本逸童や河本逸調を招聘し、演奏会を開催している。しかし、琴古流河本派の人に何故、伊藤彩山が都山流の手ほどきを受けることになったのか詳細は不明である。

当時、北海道には都山流の専門師匠がなく、札幌では北海道大学の学生達が研究会として活動していた位である。後に旭川幹部会の会員となった、北海道拓殖銀行美深支店長の富沢碧似山も、当時は北大の学生で研究会のメンバーとして活躍していた。

旭川の近くでは、深川に唯是一三（後の想山）が同じく都山流を志していた。伊藤彩山と唯是想山は旭川市内の楽器店「桐屋」で出会った。二人は意気投合し、以降は仲良く市内の糸方社中を合奏して回ったという。

このように大正中期まで、道央・道北には愛好家がいる程度で、都山流の専門師匠は存在しなかった。勿論、道南の函館には、大正8年7月から宗家派遣師匠として宮本頌山がいたし、室蘭には大阪の鈴木建山に師事して都山流指南免許を取得した村垣容山が、大正8年6月から指南の看板を掲げていた。

大正9年1月に札幌篁会の2回目の演奏会に出演するため、大阪からはるばる宗家中尾都山はじめ、畑中康山らが来道する事を聞きつけた唯是想山は、千載一遇とも言える好機を逃すまいと伊藤彩山に連れ立って演奏会に行こうと誘った。しかし、当日になって伊藤彩山は所要のため訪札できず、唯是想山一人が旭川から汽車に乗って出掛けた。この時中尾都山は「岩清水」と「夜の懐」を独奏したほか、「朝風」を畑中康山と連管した。宗家や畑中康山の生演奏を聴いた唯是想山は、深い感動を覚えるとともに、都山流を極める事を決意したのである。

畑中康山が演奏会終了後も札幌に踏みとどまって、都山流の専門師匠として教授を開始する情報を得た唯是想山は、その後入門の許しを得て、深川から札幌まで稽古に通うこととなった。当時はまだ交通機関が発達していなかったから、稽古に通うことは大変な苦労が伴ったであろう。

伊藤彩山

半年余り稽古に通った唯是想山は、大正9年8月に札幌から畑中康山を招聘し、深川劇場で小さな演奏会を開催した。この時、札幌の演奏会を聴けなかった伊藤彩山が唯是想山の誘いを受け来ていた。畑中康山の演奏を聴いた伊藤彩山は、深い感銘を受け、その場で入門を願い出て、正式に都山流を勉強する決意をしたのである。

すでに深川に門弟として唯是想山がいたこともあり、その後は月2回、畑中康山が旭川に出稽古することとなった。実業家だった伊藤彩山と豪快磊落な性格の畑中康山は大変親しい仲となったのである。翌年の大正10年3月には、大阪で都山流創始25周年を祝う記念の演奏会があった。この時、北海道から畑中康山、伊藤彩山、菊道角江（旭川在住）の3人が聴きに出掛け、宗家にお祝いの挨拶をした。伊藤彩山は、初めて宗家の演奏を聴いた。遠路はるばる大阪まで来訪したということで、彼らは静観楼で開催された懇親会に宗家の招待を受けたのである。

宴が盛り上がったところで、余興を所望されたことから、色の黒い畑中康山が熊になり、伊藤彩山が狩人になって熊狩りの真似をしたところ、万雷の拍手を受けたというエピソードが残っている。

こうした所にも、畑中と伊藤の気取らない息のあった仲を窺い知ることが出来る。伊藤彩山は大正11年2月に指南を開始した。事業がうまく行っていたこともあり、経済的に恵まれ、宗家の人望も厚かったことから、大正11年7月には市内市村紙店の大広間で、大阪から宗家中尾都山、飯田君子を招聘し、札幌からは遠藤検校を呼んで演奏会を開いた。この時、宗家は遠藤検校の箏、飯田君子の三絃で「残月」を演奏した。この日は、内陸特有の大変暑い日で、夜の演奏会でもあったため、聴衆は大広間の窓を開け放して聴いていた。運悪く、宗家達の「残月」の演奏が始まって間もなく、表通りをチンドン屋が通りかかった。せっかくの名演奏も台無しとなり、思わず遠藤検校が「やかましい」と怒鳴ったと言われている。

その後、宗家は大正12年7月に函館の錦輝館で行われた第8回特別演奏会のため来道し、その足で小樽、室蘭、夕張、札幌、旭川等でも、地元流人主催の演奏会に出演した。

さらに宗家は大正15年7月に都山流ビル建設の件で来道し、札幌の畑中康山宅に一週間程滞在した。資金調達の相談であったと思うが、この時、旭川の伊藤彩山と小樽の金森剛山が相手役を努めた。用件の合間を縫って、夜には地元の流人を集め宮城道雄の「秋の調」の講習をしたりした。

北海道最初の検定試験

昭和8年7月8日と9日の両日、札幌の今井記念館で第1回臨時准師範検定試験が行われた。この時12名が登第したが、首席は金子繡山（当時は康蕉）だった。当時、北海道は受験生が少ないこともあり定期的に検定試験を実施する仕組みにはなっておらず、受験生が相当数に達した段階で、地

元から宗家に申請して実施の可否を伺っていた。しかし、准師範登第後3年が経過すると、師範試験の受験資格を有することから、その後は3年毎に検定試験が行われるようになったのである。

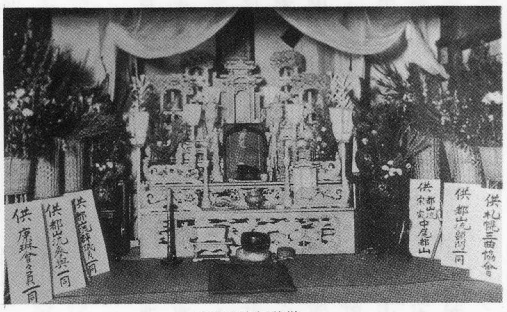
昭和11年7月12日には、同じく今井記念館で第2回准師範検定試験が行われ、14名が登第した。この時は畑中康山門下の川西康松が首席登第となった。検定試験が行われた前日の7月11日には、札幌市公会堂で康琳会主催の都山流創始40周年記念演奏会が開催され、宗家も演奏して華を添えた。また、7月12日の検定試験終了後には、場所を料亭いく代に移して流創始40周年祝賀会が開催された。

都山流40周年祝賀演奏会記念

第1回準師範昇格披露演奏会記念

都山流北海道幹部会の設立

昭和20年2月15日に、旭川の伊藤彩山が竹琳軒を許された。その後一週間ほどして恩師の畑中康山が病気のため寝込んでいると聞いた伊藤彩山は、見舞いに札幌を訪れた。しかし、旭川から伊藤彩山が来たというので畑中は無理を押して、北大病院に入院していた江部松山を見舞おうと伊藤を誘い、二人連れだって出掛けた。その後、畑中康山の容体が急変し、アッという間の他界であった。急を知った伊藤は宗家と電話連絡し、流葬と決定したのである。あいにく宗家が来道できないため、伊藤彩山が葬儀委員長を努めた。


畑中康山師葬儀

その年の秋、畑中に代わって評議員となっていた北見の江部松山が、旭川に伊藤宅を訪ねた。用件は都山流北海道幹部会設立についてであった。実業家だった江部松山は、広大な北海道において都山流を普及発展させるためには、組織強化以外に方法がないと考えた。そして、各地方別に設置されていた幹部会を統合して、全道規模の組織を創設すべきであると考えたのである。北海道の都山流を統括していた畑中康山が他界した折でもあり、江部松山の北海道幹部会設立の企画は、正に時の情勢を的確に捕らえた名案であった。伊藤の内諾を得た江部松山は、私財を投じて全道各地の幹部会を回り、設立準備の根回しに東奔西走した。江部松山の精力的な努力によって、昭和21年3月21日には定山渓温泉で、第1回目の幹部会を開催できるまでになった。江部松山の頭のなかには、来年の宗家来道があった。それまでに、今はなき畑中康山のあとを埋め、確固たる都山流の基盤を作り上げておきたかったのであろう。

翌昭和22年7月15日、旭川で准師範検定試験が行われ、宗家始め島原帆山、森田鸞山、萩原正吟、峯内章子らが来道した。この時、史上最高の36名が受験し、林康輝が首席登第した。宗家一行の来道を記念して、旭川、北見、札幌、室蘭など全道各地で演奏会を開催した。どこも熱烈歓迎で、盛況のうちに宗家一行の北海道巡演は終了した。畑中康山という重鎮を亡くしたにもかかわらず、それを組織強化で補強し、一丸となって流勢拡大に取り組んでいる北海道のあり方に感動した宗家は、江部松山が発案した北海道方式を絶賛したのである。

昭和22年准師範登第者内訳

職業		人数	
公務員等	市町村職員	4	14
	教員	4	
	国鉄職員	4	
	郵便局員	2	
会社員			14
自営業			5
その他			3
計			36

全道各地での宗家巡演も終わり、落ち着きを取り戻した昭和22年11月23日には、札幌の金子繡山宅で臨時の理事会を開催した。議案は宗家の公認を得た北海道幹部会の、今後の運営方法についてであった。先ず第一に、北海道が独立選挙区として公認された事に対する対応についてである。これまで東京以北を東部地区とし、定員5名の選挙区としていたが、北海道を独立選挙区として東部地区から切り離し、定員1名としてくれた事に対する対応方法なのである。これら選挙区の改正については、昭和25年改選の第13期評議員の選出から適用になったのである。

更に今まで臨時で開催していた准師範検定試験も、今後は定期的に実施することとなった。

こうした宗家の意向をくんだ流本部の動きに基づき、北海道幹部会の名称に宗家公認と付記したことや、支部として各地に設置していた地方幹部会の名称を、単に幹部会と改正したのである。当時の組織と役員は次の通りである。

●

北海道幹部会　会長　伊藤彩山

札幌幹部会　金子繡山理事ら39人

旭川幹部会　伊藤彩山理事ら24人

北見幹部会　江部松山理事ら12人

室蘭幹部会　飯田羨山理事ら7人

函館幹部会　竹田侃一郎理事ら7人

釧路幹部会　横道康浩理事ら5人

小樽幹部会　森　康翠理事ら4人

●

昭和23年4月25日午後3時から洞爺の日鉄会館で、宗家公認後初の総会が地元室蘭幹部会の飯田羨山の司会で開催された。

先ず議案の審議に先立ち、役員の改選があったが、会長ほかすべて留任となり、顧問に安部香山と相談役に江部松山を選出した。続いて会運営についての議論がなされ、組織強化を図るためには、奥伝以下の門人達を巻き込む必要があることから、北海道都山流人会を結成することとし、当面各師匠宛に門人名簿作成のための調査票を送付することに合意したのである。

相談役に選任された北見の江部松山は、総会のあと汽車で京都へ向かい、評議員会に出席した。この席上、宗家から最近の北海道における組織強化の取組は、流勢拡大

にとって貴重なものであり、是非みんなに披露するよう依頼された。宗家の命を受けて江部松山は、北海道における組織強化の取組状況について発表した。この北海道案は現在も支部・幹部会の関係で流組織の基本として生き続けている。

第1回都山流北海道幹部会演奏会

昭和23年9月11日午後1時から、札幌の豊平館で第1回都山流北海道幹部会の演奏会が開催された。開演に先立ち、午前11時30分からは、豊平館前に出演者総勢75名が並び記念撮影をした。

プログラムは全12曲で、最初は久保邦山指揮による「都山流本曲若葉」の演奏である。続いて「嵯峨の秋」「水三題」「本曲夕月」「虫の武蔵野」「松風」と各幹部会の演奏があった。そして、7曲目は地元札幌の演奏で「感謝の一日」だった。これが今回のメインの出し物で、洋楽器も入った大編成曲だったが、尺八のパートがリズムに乗り切れず、久保邦山の指揮でどうにかまとめたが、全体としては今一つの出来だった。後半は「都踊」「萩の露」「遠砧」「寿くらべ」と進み、最後は北見幹部会の江部松山指揮による「佐渡の印象」だった。

これまでは各幹部会単位で演奏会を開催していたが、今回の演奏会により、全道の幹部会が一堂に会することとなったのである。同じ都山流の尺八を吹いていながら、所属する幹部会が違うため、顔を合わせることがなかった流人達が、この演奏会によって結ばれることになった。また、他の幹部会の演奏を聞くことにより、技量の差を感じるようになったし、演奏のまとまり具合から組織的な結束の強弱も感じることになった。こうした流人一人ひとりに与えた影響は大きく、その成果は単に各幹部会が合同で大規模な演奏会を実施したことにとどまらず、その後の活動の支えとなったのである。そして、この事は流人だけにとどまらず、賛助出演の糸方各社中をも刺激し、良い意味での競争心を植えつけることとなった。こうして、第1回目の北海道幹部会演奏会は、予想外の大きな成果を収めるとともに、出演者の熱き思いを燃え立たせたのである。

いよいよ結束を固めた北海道幹部会は、昭和24年5月21日に、留辺蘂の武華クラブで総会を開催した。この会は地元の北見幹部会が幹事として開催したもので、江部松山の経済的援助並びに陣頭指揮よろしく、参加者から絶賛を博した。温泉に到着後ただちに一風呂浴び、役員会をしてから美しいツツジ山を散策し、全員揃ったところで総会を開催する。議案の審議が終わったところで、各幹部会ごとに本曲の吹奏をし、夜は懇親会で盛り上げるという実に細かいところまで気配りした総会だった。

この総会には更にオプショナルツアーまで付いていた。というのは、翌日の5月22日に北見市公民館で吉田晴風夫妻の歓迎演奏会が予定されていたので、希望者は貸切りバスで団体鑑賞しようというのである。

演奏会は一部と二部に別れ、一部は「千鳥の曲」など地元糸方の演奏で、二部は吉田晴風夫妻が中心となって演奏した。この時吉田晴風夫妻は自作の「かもめ」「山路」「子守唄」「小川のほとり」「海」などのほか、「春の海」「春の訪れ」「初鶯」「春の歌」「春の夜」など宮城道雄の作品を中心に演奏した。

北海道の都山流史の中で、この時期の役員達ほど大所高所で流運営を考え、精力的に活動した人達はいないであろう。現在は当時の先輩達が残した遺産で食いつないでいるといっても過言ではない。当時の役員達は、流勢拡大のためには内政を固めるだけでは足りず、外交にも力を注ぐべきと考えた。そのため昭和24年5月21日には、北海道文化団体連合会に入会したのである。

宗家はこうした江部松山の先見の明に長けた数々の功績を高く評価し、昭和24年11月1日付で彼を流本部の参与に就任させたのである。

第2回目の演奏会は、昭和24年6月19日午後0時30分から、小樽市公会堂で開催された。800人の聴衆が入る盛会だった。先ず久保邦山会長の挨拶があり、続いて出演者全員による「本曲朝の海」の演奏によって演奏会が始まった。北見幹部会の「高麗の春」、地元小樽幹部会の「臼の声」「新浮舟」など各幹部会の名演が続いたが、特に異色だったのは、久保邦山が自作の曲を演奏したことと、江部松山が「ままの川」を暗譜で演奏したことであろう。

第4回北海道都山流幹部会演奏会記念

実は小樽での演奏会を成功させるため、久保邦山北海道幹部会々長、江部松山相談役、札幌の金子繡山、小樽の森翠山らが、大会を前に小樽市議会議員をしていた西川景坡を訪ね、幹部会長に就任するよう説得していた。西川景坡も一度は了解したものの、実際には高根致山が会長となり、西川景坡は相談役として側面から協力する結果となったのである。

こうして軌道に乗った都山流北海道幹部会の演奏会は、昭和51年の流分裂まで開催地を変えつつ継続して開催されたのである。

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇その10

ラジオ（JOIK）の尺八番組

中島聖山

これまで琴古流鈴慕会を皮切りに、都山流・琴古流竹友社・上田流等の北海道進出から基盤の確立までについて、9回にわたり辿ってきたが、今回は流派にこだわる事なく、メディアを活用した尺八音楽の普及や舞台を通じた演奏活動に焦点を当てて述べてみることにする。

NHK札幌放送局の開局

我が国に於けるラジオ放送の歴史は古い。NHKの略称で親しまれている社団法人日本放送協会は、大正15年8月に設立され、同時に東京・名古屋・大阪の3局が開局してラジオ放送を開始した。この中央3局の放送開始とともに、日本放送協会の札幌支部設立の機運が高まり、昭和2年7月には事務所を設置して、総工費60万円をかけた放送局建設工事が始まった。放送局の完成とともに認可を受け、昭和3年6月5日にNHKラジオの札幌放送局が開局した。呼称はおなじみのJOIKである。

昭和3年6月5日午前11時より、札幌市公会堂で開局式が行われたが、中島ストリングオーケストラの「君が代」演奏を始め、初代局長や来賓の挨拶など式典の模様はすべてラジオ放送された。開局当時の聴取者は約1万人で、東京の24万6千人・大阪の11万2千人・名古屋の4万5千人に比べ、極端に少ない状況だった。

放送開始の日の邦楽番組は、清元「四季三葉草」、浄瑠璃「義子同お京」、長唄「浦島」だった。翌6月7日は箏曲として「楫枕」と「雲井の曲」を畑中康山の尺八、中徳風琴の箏で放送した。また3日目の6月8日には、新日本音楽と題して、宮城道雄作曲の「コスモス」を歌・上元絹枝、尺八・藤沢鈴昭、箏・吉井光江で放送し、「谷間の水車」を尺八・藤沢鈴昭、箏・吉井光江で放送した。更に「舟唄」を藤沢鈴昭の指揮で、鈴慕会の有志17人が合奏し、「夕暮れの曲」を尺八一部・藤沢鈴昭、尺八二部・橋本昭法で放送した。都山流では「岩清水」を畑中康山が独奏し、「本曲若葉」を尺八一部・畑中康山、尺八二部・南部康秀で放送した。

札幌放送局 JOIK（昭3．6．4）開局浅き初期のマイクロホン

放送は午前9時から午後9時頃までの約12時間で、プログラムは経済市況を中心に、地元の有識者を迎えての講演や語学の講座等が盛り込まれた。娯楽番組では邦楽・洋楽を問わず、地元の音楽家による演奏の録音放送が中心で、地域住民と深いかかわりを持つことにより、地域文化向上と音楽文化の普及に大きな役割を果たした。

昭和3年度（昭和3年6月5日の放送開始

平日の番組（開局当時）

時間	番組
9・00～9・20	料理献立
9・50～10・00	経済市況
11・20～11・50	海外市況
11・45～12・00	経済市況
12・00～12・02	時報
13・00～13・30	講演・講座または娯楽
13・40～13・55	経済市況
15・00～15・05	海外市況
15・30～15・35	天気予報
15・40～15・50	ニュース
15・50～15・55	経済市況
17・00～17・30	子供の時間
17・40～17・50	経済市況
18・00～18・30	講座
18・35～18・40	天気予報・時報
18・40～18・50	ニュース
19・00～	講演または講座・音楽・娯楽

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目（HBC三条ビル）☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

から昭和4年3月31日まで）の音楽放送のジャンル別放送回数と時間は表の通りである。邦楽・洋楽ともに札幌放送局で録音し放送したローカル番組が、中継番組を遙かに上回っている。特に邦楽では回数・時間ともに中継放送の2倍となっている。10か月間に放送した邦楽番組の回数は実に497回におよび、平均すると毎日1・5回放送したことになる。

昭和3年度　音楽番組放送状況

ジャンル	中継番組		ローカル番組		合計	
	回数	時間	回数	時間	回数	時間
邦楽	162	78.17	335	140.48	497	219.05
洋楽	116	60.21	185	64.24	298	124.45

現在でもNHKは邦楽番組を積極的に放送している。平成4年4月の放送番組を調べてみると、FM放送・ラジオ第一放送・ラジオ第二放送の三つの放送局分をまとめると37回になる。1日平均1回の割合であるが、残念なことにこれらはすべて中継番組であり、地元の放送局で録音したものではない。今では民放のラジオが3局開局し、職場や家庭で聴く人も多い。特に長時間車に乗っているタクシーの運転手や長距離トラックの運転手に人気があるが、地域の文化を向上させるというよりは、むしろ巷の話題を取り上げた娯楽性の高いジョッキー番組に傾斜しているのは残念なことである。

昭和6年の三曲放送

昭和6年6月5日、NHK札幌放送局は開局3周年を迎えた。これにちなみ一週間にわたって様々な記念番組が組まれ放送された。この時も地元の邦楽愛好家達による録音放送がゴールデンタイムを飾った。初日の邦楽番組は謡曲「羽衣」や長唄「四季の山姥」で始まり、松村松年博士の尺八独奏で締めくくられた。この時、博士は愛用の2尺管で古典本曲「奥州鈴慕」と「里神楽」「阿字観」の3曲を独奏した。

初期の放送風景

札幌放送局が開局して3年が経過し、少年野球の実況放送や地元の音楽愛好家達の演奏による音楽番組等を通じて、札幌を中心とする聴取者達の幅広い人気を集めたラジオは、次第に職場や家庭に普及しはじめた。そして、市民の数少ない娯楽の一つとして、無くてはならない存在になりつつあった。しかし、函館放送局の開局の動きはあったものの、北海道における放送局は依然として札幌にしか存在せず、地方への電波の発信が強く望まれていた。ラジオの普及とともに、放送番組も少しずつ姿を変え、より娯楽性の高いものを取り入れる等多様化していった。昭和6年に札幌放送局が制作したローカル番組のなかから、邦楽番組、特に三曲演奏にかかるものを拾い上げてみると表のとおりとなり、3周年記念番組を組んだ6月の前後を除けば、月平均2曲程度となっている。開局当時の毎日1.5曲と比べると極端な減り方である。これは娯楽番組のなかで多様なプログラムが組まれるようになったからであり、中継放送と同様の傾向を示している。年間を通じて一番多いのが講談で、独唱・浪花節・長唄と続き、三曲は20番目に位置している。

昭和6年の三曲放送（JOIKのみ）

月	放送曲目	曲数
1	春の曲	1
2	八千代獅子・七福神	2
3	椿づくし・梅の春	2
4	若葉・春日詣	2
5	春の海・近江八景・楫枕・軒の雫・春の夜の夢・山の水車・朧夜	7
6	五月晴・奥州鈴慕・豊年獅子・松竹梅・夕顔・深山ひぐらし・四季の眺・朝霧・阿字観・里神楽	10
7	残月・夏の眺・雨夜の月・三谷・八千代獅子	5
8	一二三鉢返・松風・けしの花花・秋の言葉	4
9	臼の声・秋の曲・寿くらべ	3
10	須磨の嵐・虚空・春の宵	3
11	瑳峨の秋・夕月	2
12	千代の御影	1

昭和27～28年の邦楽番組

最初は札幌にしかなかったNHKのラジオ放送局も、函館、小樽、北見、室蘭、釧路と各地に相次いで開局し、ほぼ全道をネット出来るようになった。また、北海道放送（HBC）の開局による民放ラジオの放送も開始され、質量ともに充実することとなった。

昭和27年から28年にかけての北海道における邦楽番組（特に三曲）を放送局別にまとめてみると、表のようになる。特徴的なのは北見放送局が13回と、NHK5局の約半分を占めていることである。これは、江部松山を中心とする北見地方の邦楽愛好家達の積極的な

—創造する映像集団— Something out of Nothing

円グループは

ひとりぼっちの人間が個人の尊敬、自由、
生活を守るためにつくられた人間集団です。

PROJECT ZERO

円グループ代表　渡辺順一

札幌市西区24軒3条2丁目4番12
琴似グランドハイツ210号
TEL 644-1876

放送局別邦楽番組（昭和27～28年）

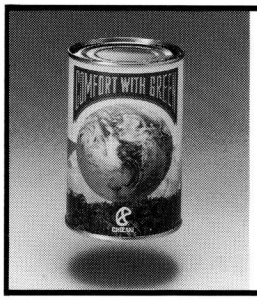
放送局	放送回数
NHK 札幌放送局	5
NHK 小樽放送局	1
NHK 釧路放送局	3
NHK 北見放送局	13
NHK 室蘭放送局	3
HBC	5
合計	30

放送局への働きかけと、質の高い演奏を目指した精進の結果であろう。放送曲目も古曲・新曲・尺八本曲とバランスがとれ、聴取者を飽きさせない努力が伺える。また、邦楽界特有の封建的な風潮に陥ること無く、流派や芸歴を超越して技量の向上に努めていたことを窺い知ることが出来る。牧野圭子は都山流尺八の牧野瑢山の長女で、宮城会の乾社中に所属していたが、当時はまだ中学3年生だったし、橘俶子は高校3年生だった。こうした、時代を担う若手演奏家の育成に目を向け、研鑽の場を惜しみなく与えていたことは、当時としては驚異的な出来事であり、三曲界のリーダーとしての江部松山の卓越した指導力と財界の雄として身に付けていた先見の明があったからであろう。

昭和28年7月4日には、NHK釧路放送局の開局15周年を祝う記念放送があり、都山流尺八釧路幹部会の有志が地元糸方の三谷社中の賛助を得て宮城道雄作曲の「御代の祝」を放送した。この時、琴古流は林社中と「みだれ」を放送した。

同じく昭和28年の夏、NHK札幌放送局は画期的なプログラムを考えていた。当時、都山流札幌幹部会で活躍していた久保邦山が還暦を迎えるため、彼の作品を特集した還暦を祝う放送を実現しようとするものである。放送は7月9日と28日の2回に分けられ、初日は「石狩平野」と「幼かりし頃」の2曲が放送された。糸方は親交の深かった生田流正派の前田雅楽寿美だった。2日目は「寂」と「夜露」の2曲だったが、尺八2重奏曲の「夜露」では足立知山が助奏を努めた。

年月日	放送局	曲目	演奏
昭27 1／3	NHK北見	春の訪れ 松竹梅	尺八・牧野瑢山、箏・乾早紀子 箏・清水文子、乾早紀子、三絃・石川雅蒼
1／11	NHK北見	明治松竹梅	尺八・江部松山、箏・清水文子、小柳良子
2／6	NHK北見	初鶯	箏・伊藤鏡子、石田恭子、牧野圭子
5／2	HBC	湖上の舟遊 都の春	尺八・森翠山、箏・山内雅楽暁、天坂雅楽穂 尺八・寺山浩雲、箏・北川栄浜、三絃・北川きく
5／3	NHK小樽	青海波	尺八・高根致山、森・翠山
5／6	NHK北見	かもめ・山路 高麗の春	尺八・江部恍山、箏・乾早紀子 尺八・江部恍山、箏・伊藤鏡子、三絃・乾早紀子
5／30	NHK北見	湖上の月	尺八一部・江部松山、尺八二部・江部恍山
6／5	NHK北見	記念の鷹の羽	箏・可香谷りの、三絃・追永きみ香
6／27	NHK釧路	朝緑	尺八一部・浜形呂久山、島岡錦雅 尺八二部・高垣萩山、久保芳宇山
7／5	NHK北見	光輝 再の憶い	尺八・松田松笛、箏・山田泰子、滝川敦子
7／5	NHK北見	花の露草 湖上の舟遊	尺八・江部恍山、箏・石川雅蒼
7／7	NHK北見	秋の庭	尺八・牧野瑢山、箏・橘俶子、三絃・牧野圭子
9／4	NHK北見	秋の庭	尺八・清水松童、箏・山崎一枝、三絃・石川道子
9／14	NHK北見	晩秋・山路	尺八・江部松山、箏・乾早紀子
10／2	NHK北見	平和の光	箏・可香谷りの、平島双
11／3	HBC	晩秋	尺八・金子繡山、矢野琇宇山
11／18	NHK札幌	朝霧	尺八・都山流やまびこ会
11／27	HBC	秋の曲	尺八・蘇武紀山、箏・蘇武夫人、新田佐美治
昭28 1／3	NHK室蘭	佐渡の印象	尺八・飯田羨山、唐牛錦山、赤田綿翠 箏・槇尾社中、室蘭洋楽協会 三絃・室蘭三曲協会
1／6	NHK札幌	御山獅子	尺八・工藤峴山、高橋渉童、小谷鈴峯 箏・岸高野、吉田早苗、新田佐美治、橋本賀寿井 三絃・菊成鳳琴、前田雅楽寿美、高橋操秀
1／24	NHK室蘭	若人の喜び 平和の山河	尺八一部・唐牛錦山、井川伯山 尺八二部・川宮松山、上田報山
2／21	NHK室蘭	春の訪れ	尺八・佐藤嶋山、箏・広瀬雅津
3／2	NHK札幌	春の曲	尺八・工藤峴山、箏・前田雅楽寿美
4／4	HBC	春の海	尺八・金子繡山、箏・前田雅楽寿美
6／21	NHK釧路	春の光	尺八一部・高垣萩山、島岡錦雅、堀吼祥 尺八二部・久保芳宇山、藤巻路昭、乙川吼彦
7／4	NHK釧路	御代の祝 みだれ	尺八・都山流釧路幹部会、箏・三谷社中 尺八・琴古会、箏・林社中
7／9	HBC	石狩平野 幼かりし頃	尺八・都山流札幌幹部会、箏・前田社中 尺八・久保邦山、箏・前田雅楽寿美
7／21	NHK札幌	水の蓮	尺八・大道繡玲、箏・青山雅楽都柳
7／28	NHK札幌	寂 夜露	尺八・久保邦山、箏・前田雅楽寿美 尺八・久保邦山、足立知山
11／6	NHK北見	漁村の曙	尺八・江部松山、箏・清水文子



45億年分の1。

推定年令、45億年。
壮大ないくつもの変遷を重ねてきた地球に、
私たちは今年1年どれぐらい想い入れできるだろう。
少しずつ、着実に、地球の生命と人間の関係を親しくしたい。
1991年、創業100周年――地球を、人間を、
未来を見つめた共生空間の創造を続けながら、
私たち地崎工業は次の時代へ歩みます。

考えたいのは、地球の未来です。
株式会社 地崎工業